

琉球大学学術リポジトリ

沖縄女性の伝統的性役割行動からみた地域ケア・システムモデル構築に関する研究

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2007-03-03 キーワード (Ja): 後期高齢者, 生活自立度, ソーシャルサポート, 生活満足度, 抑うつ傾向, 自尊感情, 社会的健康度, 伝統的慣習 キーワード (En): elderly peoples, degree of the life independence, social support, degree of the life satisfaction, depression tendency, self-esteem, degree of the social health, traditional customs 作成者: 與古田, 孝夫, 石津, 宏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/141

具志川市平良地区の伝統的社会文化的側面からみた高齢者のメンタルヘルス についての検討

I. 緒言

沖縄県は全国でも有数の長寿地域であり、その要因の一つに沖縄のもつ社会文化的側面の重要性が指摘されている。本研究は、こうした沖縄の地域特性に基づく伝統的な民間信仰や日常的な儀礼行為の実状について調査し、高齢者のメンタルヘルスや QOL (quality of life) との関連から検討することを目的とした。

II. 対象と方法

沖縄県具志川市平良川地区在住の 65 歳以上の男女 324 名から無作為抽出した 200 名を対象に、平成 13 年 3 月から 4 月にかけて訪問調査を実施した。そのうち痴呆、入院・入所、転居等を除く 120 名を分析対象とした。調査に際しては対象者にあらかじめ調査の趣旨と内容を説明し、同意を得た。調査内容は基本属性のほか伝統行事や祭事への参加状況、日常の仏壇や神棚への「拝み」の状況、沖縄の伝統的なシャーマンであるユタへの相談経験、死生観などを設問した。分析は、対象者を前期高齢者 (65~75 歳未満)、後期高齢者 (75 歳以上) の 2 群に分類し、各群ともに男女別に比較し検討した。

III. 結果及び考察

1. 性・年齢別にみた対象者の基本属性 (表 1)

性別でみると、男性に比べ女性の割合が高く、学歴では、前・後期とも高学歴の者は男性が高い割合を示していた。家族構成は、前期高齢者の男女では「夫婦と子供」の占める割合が高く、後期高齢者では、男性は「独居」・「夫婦のみ」の占める割合が、女性では「本人と子供」の占める割合が高いという結果であった。

2. 生活および健康状況との関連 (表 2)

就労の有無でみると、前後期高齢者とも男性で就労者の占める割合が高く、前期高齢者では統計的にも明らかな差異が認められた。暮らし向き、健康状況では性差は認められず、経済状況や健康状態の良好な者が高い割合を示していた。

表1 性・年齢別にみた基本属性

		n (%)			
内 容		前期		後期	
		男 (n=32)	女 (n=41)	男 (n=13)	女 (n=34)
性別		32 (71.1)	41 (54.7)	13 (28.9)	34 (45.3)
学歴	未就学	0 (0.0)	2 (5.9)	1 (7.7)	4 (14.8)
	小学校	3 (9.7)	10 (29.4)	1 (7.7)	10 (37.0)
	中学校	11 (35.5)	8 (23.5)	3 (23.1)	10 (37.0)
	高等学校	16 (51.6)	13 (38.3)	7 (53.8)	3 (11.2)
	大学	1 (3.2)	1 (2.9)	1 (7.7)	0 (0.0)
家族構成	独居	4 (12.5)	9 (22.0)	5 (38.5)	6 (17.6)
	夫婦のみ	11 (34.3)	9 (22.0)	5 (38.5)	5 (14.7)
	夫婦とその子ども	12 (37.5)	14 (34.1)	2 (15.4)	8 (23.5)
	本人とその子ども	2 (6.3)	6 (14.6)	1 (7.7)	13 (38.3)
	その他	3 (9.4)	3 (7.3)	0 (0.0)	2 (5.9)
宗教	祖先崇拜	28 (87.5)	37 (90.2)	13 (100)	32 (94.2)
	キリスト教	3 (9.4)	3 (7.4)	0 (0.0)	1 (2.9)
	仏教	1 (3.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (2.9)
	創価学会	0 (0.0)	1 (2.4)	0 (0.0)	0 (0.0)

表2 生活および健康状況との関連

		n (%)			
内 容		前期		後期	
		男 (n=32)	女 (n=41)	男 (n=13)	女 (n=34)
就労	有	13 (40.6)	6 (14.6) **	6 (46.2)	8 (23.5)
	無	19 (59.4)	35 (85.4)	7 (53.8)	26 (76.5)
暮らし向き	ゆとりがある	3 (9.4)	2 (4.9)	3 (23.1)	6 (17.7)
	ややゆとりがある	20 (62.5)	30 (73.2)	6 (46.1)	22 (64.7)
	やや苦しい	8 (25.0)	8 (19.5)	4 (30.8)	5 (14.7)
	苦しい	1 (3.1)	1 (2.4)	0 (0.0)	1 (2.9)
健康状況	非常に健康	12 (37.5)	15 (36.6)	8 (61.5)	15 (44.1)
	まあ健康なほう	9 (28.1)	11 (26.8)	3 (23.1)	12 (35.3)
	あまり健康でない	7 (21.9)	12 (29.3)	2 (15.4)	4 (11.8)
	健康ではない	4 (12.5)	3 (7.3)	0 (0.0)	3 (8.8)

χ^2 検定 ** $p < 0.01$

3. 性・年齢別にみた心身および社会的環境要因の比較 (表3)

老研式活動能力では、前後期高齢者とも女性の活動能力が有意に高値を示していた。その理由として、日用品の買い物や食事の用意、請求書の支払いなど、比較的女性の社会的・性的役割と親和性を持つ内容であることが、その一因として考えられた。

表3 性・年齢別にみた心身および社会的環境要因の比較 平均 (S D)

項目	前期		後期	
	男 (n=32)	女 (n=41)	男 (n=13)	女 (n=34)
老研式活動能	11.4 (1.7)	11.6 (1.7) ***	8.8 (3.7)	10.4 (2.1) ***
ソーシャルコンタクト				
子供	3.3 (1.6)	3.8 (1.4)	3.3 (1.9)	3.3 (1.7)
近所	3.7 (0.8)	3.8 (0.9)	4.0 (0.8)	3.6 (0.9)
友達	3.4 (1.0)	3.4 (1.1)	3.2 (1.0)	3.3 (0.9)
ソーシャルサポート	10.6 (2.6)	11.2 (2.4)	10.1 (2.7)	11.2 (1.7)
生活満足度K	5.2 (2.3)	5.5 (2.1)	6.5 (1.8)	5.5 (2.1)
自尊感情 (self-esteem)	28.8 (6.3)	29.4 (5.9)	31.5 (4.1)	29.8 (5.2)

4. 性・年齢別にみた伝統行事や祭事への参加状況 (表4)

伝統行事や祭事への参加状況は、前後期とも女性で高く、なかでも後期女性では 清明祭、お盆、お彼岸、年の夜、ムーチーの参加で、有意に高くなっていた。沖縄固有の信仰・宗教は祖先崇拜であり、現在なお祖先祭祀を中心とする伝統的祭事や行事が根強く残っている。こうした祖先祭祀の重要な担い手が高齢女性であり、今回の結果もこれを裏づけるものであった。このことから沖縄の伝統的祭事や儀礼行為の存在は、高齢女性の生きがいや生活のほりといったメンタルヘルスやQOLを考える上でも無視できない要因であると考えられる。一方で、門中ウガンは、前期高齢者では男性に有意に高い値を示していた。門中は共同墓を中心とする男性系列の血族集団であり、このことが門中ウガンの参加が男性に高い理由として考えられた。

表4 性・年齢別にみた伝統行事や祭事への参加状況

内容	前期		後期		n (%)
	男 (n=32)	女 (n=41)	男 (n=13)	女 (n=34)	
清明祭	30 (93.8)	40 (97.6)	10 (76.9)	33 (97.1)	*
お盆	30 (93.8)	40 (97.6)	10 (76.9)	33 (97.1)	**
お彼岸	29 (90.6)	39 (95.1) ***	10 (76.9)	33 (97.1)	***
年の夜	28 (87.5)	38 (92.7)	10 (76.9)	33 (97.1)	*
ムーチー	28 (87.5)	37 (90.2)	9 (69.2)	33 (97.1)	**
トーカチー	27 (84.4)	39 (95.1)	10 (76.9)	31 (91.2)	
カジマヤー	27 (84.4)	39 (95.1)	10 (76.9)	30 (88.2)	
七夕節句	22 (68.8)	29 (70.7)	8 (61.5)	29 (85.3)	
門中ウガン	21 (65.6) *	16 (39.0)	8 (61.5)	19 (55.9)	

χ^2 検定 * $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ *** $p < 0.01$

5. 「拝み」に関する意識について（表5）

拝みに関する意識と実状についてみると、日常の拝みは、前期高齢者では「毎日」とする者は女性で有意に高値を示していた。拝み始めた年齢では、前後期とも男性は9歳未満とする者が半数以上を占めているのに対し、女性では前後期とも30歳以上の占める割合が高く、分家や夫・姑の死をきっかけに拝む者が多数を占めていた。

拝むことの意味としては、前期男性は先祖供養とする者が、後期女性では不安の解消、ストレス解消とする者が有意に高値を示していた。また、日常生活の拝みの必要性については、男女とも肯定する回答が多数を占めていた。

沖縄の高齢者にとって「拝む」ことは、生活習慣の一部であるといえる。しかし、今回の結果から、男性は習慣、先祖供養など形式的・儀礼的側面から拝みを捉えているのに対し、女性では心の安らぎ、ストレス解消や、悩みの解消といった内面的、精神的側面から拝みを位置づけており、拝みをめぐるこうした性差の相違は、高齢者のメンタルヘルスを考える上からも興味深い知見と考える。

表5 「拝み」に関する意識について

内 容		n (%)			
		前 期		後 期	
		男 (n=32)	女 (n=41)	男 (n=13)	女 (n=34)
日常の拝みの状況	毎日	7 (21.9)	19 (46.3) *	5 (38.5)	21 (61.8)
	時々	21 (65.6)	21 (51.3)	8 (61.5)	13 (38.2)
	拝まない	4 (12.5)	1 (2.4)	0 (0.0)	0 (0.0)
拝みはじめた年齢	9歳未満	13 (50.0)	7 (17.5) *	8 (72.7)	3 (9.4) *
	10歳～19歳	1 (3.8)	1 (2.5)	1 (9.1)	1 (3.1)
	20歳～29歳	2 (7.7)	15 (37.5)	0 (0.0)	8 (25.0)
	30歳以上	10 (38.5)	17 (42.5) *	2 (18.2)	20 (62.5)
拝むことの意味	習慣	25 (89.3)	34 (85.0)	11 (84.6)	26 (76.5)
	先祖供養	24 (85.7)	25 (62.5) *	9 (69.2)	25 (73.5)
	心の安らぎ	22 (46.4)	30 (52.5)	10 (76.9)	31 (91.2)
	生きがい	12 (42.9)	15 (37.5)	6 (46.2)	24 (70.6)
	不安の解消	13 (40.6)	21 (51.2)	4 (30.8)	23 (67.6) *
	ストレス解消	9 (32.1)	17 (42.5)	3 (23.1)	22 (64.7) *
	意味はない	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
困ったときの拝み	あり	10 (35.7)	20 (50.0)	6 (54.5)	16 (48.5)
	なし	18 (64.3)	20 (50.0)	5 (45.5)	17 (51.5)
生活に拝みは必要か	はい	22 (78.6)	36 (90.0)	9 (69.2)	30 (88.2)
	いいえ	6 (21.4)	4 (10.0)	4 (30.8)	4 (11.8)

χ^2 検定 *p<0.05

6. 性・年齢別にみた死生観に関する意識（表6）

死生観に関する意識では、男女とも神や仏の存在を肯定する者は、7割前後と多数を示しており、死後の世界、靈魂の存在についても半数以上が肯定的な回答を示していた。「生まれかわり（輪廻転生）」を肯定する者は20%前後と比較的少数であった。沖縄では祖霊を中心とする靈的信仰が強く、死後も靈魂として日常生活に存在し続けると考えられている。今回の結果から、高齢者のもつ死生観が、老いや死に対する受容とも、相互密接に関連しており、メンタルヘルスや健康長寿の側面からも重要な因子として寄与している可能性が示唆された。

表6 性・年齢別にみた死生観に関する意識

項目		前期		後期		n (%)
		男 (n=32)	女 (n=41)	男 (n=13)	女 (n=34)	
死 生 観 に つ い て	神や仏の存在	ある	24 (75.0)	29 (70.7)	9 (69.2)	24 (70.6)
		ない	8 (25.0)	12 (29.3)	4 (30.8)	10 (29.4)
	死後の世界	ある	18 (56.3)	29 (70.7)	5 (38.5)	22 (64.7)
		ない	14 (43.7)	12 (29.3)	8 (61.5)	12 (35.3)
	靈、魂の存在	ある	19 (61.3)	24 (58.5)	5 (38.5)	16 (47.1)
		ない	12 (38.7)	17 (41.5)	8 (61.5)	18 (52.9)
生まれかわり	ある	7 (21.9)	12 (29.3)	2 (15.4)	11 (32.4)	
	ない	25 (78.1)	29 (70.7)	11 (84.6)	23 (67.6)	

χ^2 検定 n.s.

7. 性・年齢別にみたユタ（シャーマン）への相談経験（表7）

ユタは神がかりなどの状態で神霊や死霊など超自然的存在と直接に交流するもので、一般的にシャーマンとしての位置づけがなされている。そのユタへの相談経験やユタに対する意識についてみると、ユタへの相談経験は前後期ともに女性で有意に高値を示していた。ユタへの印象で見ると、前後期の男女とも肯定的回答が多数を占めていた。なかでも前期高齢者では、男性が女性に比べ有意に肯定的回答が高く、女性では「わからない」とする者が30.4%を占めていた。このことは、男性に比べ女性の場合、家族の健康や運勢、悩みなど多岐にわたりユタに相談しており、その評価をめぐる錯綜した心理が結果に影響したことが考えられる。サーダカウマリ、カミダリーの有無では、とくに統計的差異は認められなかったが、いずれも女性に高いという結果であった。以上の結果は、ユタへの弊害も指摘されるなか、依然としてユタを必要とする沖縄の地域社会性を示しており、高齢者の心の健康を考える上からも無視できない結果であると考えられる。

表 7 性・年齢別にみたユタ（シャーマン）への相談経験

項目		n (%)			
		前期		後期	
		男 (n=32)	女 (n=41)	男 (n=13)	女 (n=34)
ユタへの相談の有無	行く	1 (3.1)	4 (9.8) **	0 (0.0)	4 (11.8) ***
	ときどき行く	6 (18.8)	18 (43.9)	2 (15.4)	9 (26.5)
	行かない	25 (78.1)	19 (46.3)	11 (84.6)	21 (61.7)
ユタへの相談の印象	よかった	6 (85.7)	16 (69.6) **	3 (75.0)	13 (92.9)
	悪かった	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	わからない	1 (14.3)	7 (30.4)	1 (25.0)	1 (7.1)
サーダカウマリ (精高い生まれ)	ある	4 (12.5)	6 (15.0)	1 (8.3)	12 (35.3)
	ない	28 (87.5)	34 (85.0)	11 (91.7)	22 (64.7)
カミダーリ (神憑り)	ある	0 (0.0)	1 (2.5)	1 (8.3)	5 (9.7)
	ない	32 (100)	39 (97.5)	11 (91.7)	29 (90.3)

χ^2 検定 ** p<0.01 *** p<0.001

IV. まとめ

今回の結果から、沖縄の高齢者、とくに高齢女性の健康長寿を考える上で、伝統的社会的文化的側面から精神的健康やQOLとの関連について検討することも重要であることが考えられた。

謝辞

本稿を終えるにあたり、具志川市役所の保健婦を始めとする職員の方々及び、訪問調査に御協力下さった具志川市平良川地区の住民の皆様にご心より御礼申し上げます。

V. 参考文献

- 1) 近藤功行：琉球文化圏における長寿要因をめぐる調査研究—高齢女性の役割期待と精神生活の側面並びに与論島住民の終末行動から得られた死生観の側面を通して—平成8年度長寿科学総合研究事業「沖縄の気候・風土と長寿に関する研究」報告書（主任研究者 崎原 盛造）、1997
- 2) 崎原盛造：沖縄及び秋田における在宅高齢者の家族形態と生活満足度に関する研究平成8年度長寿科学総合研究事業「沖縄の気候・風土と長寿に関する研究」報告書（主任研究者 崎原 盛造）、1997
- 3) 酒井亮二（研究代表者）：沖縄先住民における祖先崇拜行動と保健医療行動の関連性に関する質問紙調査. 民族衛生 56(6): 292-298, 1990

具志川市平良地区高齢者の自尊感情 (Self-esteem) とその関連要因についての検討

I はじめに

日本の最南端に位置する沖縄県（以下、沖縄）は全国でも有数の長寿県である。また、沖縄は地縁・血縁の絆が強く、祖先崇拜を中心とする伝統的な民間信仰や儀礼行為など、伝統文化と風土に培われた、相互扶助（ユイマール）のネットワークが確立された地域特性を有している。こうした伝統的な地域社会に果たす高齢者の役割期待は大きく、沖縄の長寿要因の一つに伝統的な地域特性にもとづくコスモロジーや日常的な信仰活動の存在も指摘されている¹⁾。

高齢者のメンタルヘルスに関連した先行研究では、高齢者の self-esteem（自尊感情）は心身の健康や経済的側面、社会活動能力や交流頻度が影響すること²⁾、沖縄の高齢者は他県と比較して抑うつ症状の有症率が最も低いことが指摘されている⁴⁾。

このことから本研究では、沖縄の地域特性をも踏まえ、高齢者の self-esteem と社会心理学的および伝統的社会文化的要因との関連から検討を行った。

II 対象と方法

沖縄県具志川市平良川地区在住の 65 歳以上の男女 324 名から無作為抽出した 200 名を対象に、平成 13 年 3 月から 4 月にかけて訪問面接調査を実施した。そのうち痴呆、入院・入所、転居等を除く 120 名を分析対象とした。

Self-esteem の測定には、Rosenberg の 10 項目からなる self-esteem 日本語版⁵⁾を使用した。この尺度は自己に対する肯定的な態度を測定する 5 項目と、否定的な態度を測定する 5 項目からなり、「よくあてはまる」(4 点) から「全くあてはまらない」(1 点) までの 4 件法で評価を行い、得点が高くなるにともない自己全体を肯定的にとらえ、高く評価していることを示している。

解析は、self-esteem と基本属性や心身の健康状態、心理社会的側面の測定には、日常の生活満足度を測定する生活満足度 K (配点 1-4 点)、主観的健康観を測る健康度自己評価 (同 1-4 点)、社会活動能力を測定する老研式活動能力指標 (同 1-4 点)、対人間関係や対人的交流頻度を測るソーシャルサポート (同 1-4 点) およびソーシャルコンタクト (同 1-4 点) などの各スケールを使用し、さらに伝統行事への参加状況および死生観との関連から検討を行った。

III 結果と考察

Self-esteem と基本的属性との関連をみると (表 1)、就労状況と経済状況で有意差を認め、仕事を有する者、生活にゆとりのある者で self-esteem 得点も高値を示していた。橋本ら³⁾の先行研究においても、self-esteem は有職者で経済的満足感の高い者で有意に高値を示しており、本結

果もこれを裏づけるものであった。また、就労と経済状況との関連でみると、就労にはある程度の精神身体能力が必要であり、経済的には暮らし向きにも影響を与えるものである。したがって、今回の結果は高齢者の self-esteem にはこうした身体的・精神的側面や生活環境が相互に関連しあいながら寄与してる可能性を示唆しており、高齢者のメンタルヘルスや QOL (qualityoflife) の側面からも無視できない要因であると考ええる。

Self-esteem と心身の状況や社会的指標との関連では (表 2)、生活満足度 K、健康度自己評価、老研式活動能力、ソーシャルサポート、子供とのソーシャルコンタクトにおいて有意な正の相関を認めた。これら有意な相関関係にあるスケールを独立変数、self-esteem 得点を従属変数とする重回帰分析の結果、生活満足度 K、健康度自己評価、老研式活動能力で有意な関連を示した。この結果は、生活満足度や社会活動能力が高く、周囲からのサポート、とくに子供との交流頻度が self-esteem に影響することを示している。生活満足度 K は、「人生全体についての満足感」「心理的安定」「老いについての評価」の 3 つの因子からなる尺度で、今回の結果から生活満足度と self-esteem とが相互に肯定的に影響し合うことが示された。健康度自己評価、老研式活動能力と self-esteem との関連はこれまでも報告されており⁶⁾、本結果からも身体的健康状況や活動能力は精神的な面も含め、self-esteem にも影響を及ぼすことが示された。また、現代の高齢者は自立志向が強く、ADL (activities of daily living) の自立は自信や誇りにつながる一方で、他者への依存には抵抗感や罪責感があるとされており⁷⁾、高齢者のメンタルヘルスの傾斜からも身体的自立の維持・向上に向けた予防学的立場からの取り組みが

表 1 基本的属性と self-esteem との関連

変 数		人	平均 (SD)
性	男	45	29.6 (5.8)
	女	75	29.6 (5.5)
年齢 ¹⁾		120	r=.0928
出身	県内	112	29.4 (5.7)
	県外	8	32.3 (3.2)
就労	有	33	31.5 (5.4) *
	無	87	28.8 (5.6)
最終学歴	未就学	7	24.9 (6.5)
	小学卒	24	27.7 (6.2)
	中学卒	32	28.9 (5.3)
	高校卒	39	30.8 (4.7)
	大学卒	3	35.0 (1.0)
	その他	15	31.9 (5.6)
家族構成	独居	24	29.1 (5.7)
	夫婦	30	30.2 (5.5)
	2 世代	36	28.7 (6.3)
	本人と子供	22	30.5 (4.2)
	その他	8	29.9 (6.4)
宗教	有	116	29.7 (5.6)
	無	4	25.5 (6.4)
経済状況	ゆとりがある	92	30.7 (5.3) ***
	苦しい	27	25.6 (5.1)

t-検定 *p<.05 ***p<.001

¹⁾ 年齢は Pearson correlation

表 2 心身および社会的側面と self-esteem との関連

内 容	r	β
生活満足度 K	.611 **	.428 ***
健康度自己評価	.512 **	.275 ***
老研式活動能力	.354 **	.169 **
ソーシャルサポート	.307 **	.057
ソーシャルコンタクト		
子供	.282 **	.122
近隣	.051	-
友達	-.077	-
重相関係数 (R)		.717 ***

r: 相関係数 β : 標準偏回帰係数

p<.01 *p<.001

今後ますます重要であると考える。

Self-esteem と伝統行事への参加状況との関連では (表 3)、行事や祭事へ参加している者、これら行事や祭事で頼りにされているとする者で self-esteem 得点も有意に高値を示した。また、仏壇や神棚を拝むことの意味として、生きがい、習慣とする者は self-esteem 得点も有意に高値であった。沖縄の高齢者にとって仏壇やヒヌカン (火の神) への拝みは習慣となり日常生活の一部であるといえる⁸⁾。沖縄では、固有の信仰・宗教は「祖先崇拜」であり、その担い手は高齢者であるため、伝統的な行事や風習における高齢者の役割は大きい。ライフサイクルを通してこうした社会的役割に関わることは、結果として高い self-esteem 獲得にも寄与していることが考えられる。今回の調査では、拝みの内容と

して、家族の健康や安全とするものが大部分であり、家族の守り手として、宗教機能の担い手として生きがいを感じており、こうした高齢になっても生き生きと主体的に生活を送ることが、自己肯定感を高めることに繋がっていると考える。

Self-esteem と死生観との関連では、神仏の存在を肯定する者で self-esteem 得点も有意に高値を示していた。沖縄では、人は死後「カミ」となって人々の日常生活に存在し続けると考えられ、日常生活、および伝統行事での拝みは祖先との対話の場となっている⁹⁾。また、高齢者を尊重し、敬う地域特性は、高齢者にとって老いへの受容や肯定感につながり、自己に対する self-esteem を高める要因として無視できないことが推察された。結語以上の結果から、高齢者の自尊感情には心身の状況や生活環境要因、伝統的な地域における行事や祭事への参加およびそれを担う役割の存在が高齢者の QOL を高め、自尊感情にも影響している可能性が考えられた。

表 3 伝統行事への参加状況および死生観と self-esteem との関連

		人	平均 (SD)
伝統行事や祭事について			
行事や祭りへの参加	参加	60	31.6 (4.5) **
	不参加	56	27.1 (5.9)

行事や祭りの時、頼りにされる	はい	60	31.6 (4.5) ***
	いいえ	56	27.1 (5.9)

拝みについて			
拝みをする	はい	112	29.7 (5.4)
	いいえ	8	27.1 (8.1)

拝むことの意味	心のやすらぎ	93	29.9 (5.6)
	不安の解消	61	30.3 (5.4)
	先祖供養	83	30.3 (5.1)
	生きがい	57	30.8 (5.0) *
	ストレス解消	51	29.8 (5.5)
	習慣	96	30.7 (5.0) ***

死生観について			
カミや仏の存在	ある	86	30.3 (5.5) *
	ない	34	27.8 (5.7)

死後の世界	ある	74	22.0 (2.9)
	ない	46	23.0 (3.3)

霊 (魂) の存在	ある	63	29.9 (5.1)
	ない	55	29.3 (5.9)

生まれ変わり	ある	32	21.5 (3.0)
	ない	88	22.7 (3.1)

t-検定 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

文 献

- 1) 大橋英寿：沖縄シャーマニズムの社会心理学的研究. 397-402、弘文堂、東京、1998
- 2) 大和三重、前田大作、野口祐二：日本の高齢者の自尊感情とその要因分析. 老年社会学 12 : 147-167、1990
- 3) 橋本有理子、本村汎：老年期の自尊感情に関する一研究一属性要因・ソーシャルサポートの授受の評価要因などとの関連要因において一. 大阪府立大学生生活科学部紀要 45:231-243、1997
- 4) 新野直明：沖縄における高齢者の抑うつ症状有症率. 平成 8 年度厚生科学研究補助金（長寿科学総合研究事業）成果報告書 39-43、1997
- 5) 星野命：感情と心理の教育（2）. 児童心理 24 : 161-193、1970
- 6) 大和三重他：日本の高齢者の自尊感情とその要因分析. 老年社会科学 12 : I47-167、1990
- 7) 南雅樹、出村慎一、野田政弘：在宅高齢者を対象とした生活満足度尺度の作成. 教育医学 46 : 961-969、2000
- 8) 鈴木信：沖縄の長寿の秘密. 健康の科学シリーズ 9 沖縄の長寿 49-77、学会センター関西、大阪、1999
- 9) 近藤功行：琉球文化圏における長寿要因をめぐる調査研究一高齢女性の役割期待と精神生活の側面ならびに与論島住民の終末行動から得られた死生観の側面を通して一. 平成 8 年度厚生科学研究補助金（長寿科学総合研究事業）成果報告書 67-75、1997